

# **G8 Youth Summit 2009 Milan, Italy**

## **会議報告書**

**March 15th - 21st 2009  
Bocconi University  
Milan, Italy**

**Edited by:  
G8 Youth Summit Japan,  
Japanese Delegation 2009**



**<http://www.g8youthsummit.org/>**



## 目次

G8 Youth Summitの歩み	2
G8 Youth Summit 2009概要	3
日本代表団一覧	5
Giorgia Mcloni氏からのメッセージ	6
大会期間中の活動	8
G8 Youth Summit 2009の成果	12
日本代表団所見	19
G8 Youth Summit 2010へ向けて	29
スポンサー一覧（日本代表団）	30
協力団体一覧（日本代表団）	30
謝辞	31
G8 Youth Summit Japan (日本事務局) 概要	32

## G8 Youth Summit の歩み

G8 Youth Summitとは、年に一度開催されるG8首脳会談をモデルとした、学生(Youth)による国際会議です。実際のサミットに先立って学生が協議した成果をCommuniqué(コミュニケ、共同宣言文)としてまとめることで、Youth独自の視点を、<理想>と<現実>のあいだを振り子のようには揺れ動く国際社会へのひとつのオルタナティブとして提示しつづけています。



2006年4月にロシア・サンクトペテルブルクで開催された第1回大会では、G8各国(日・英・米・仏・独・伊・加・露)から各8人の代表団、欧州連合(EU)代表、国際連合代表役の学生が参加しました。翌年(2007年)の第2回大会は、ドイツ・ベルリンで開催されました。ベルリン大会では、新たに中国・メキシコ・南アフリカからの代表団がオブザーバーとして議論に加わりました。さらに2008年3月には、日本・横浜で第3回大会が開催され、G8各国とオブザーバー(ブラジル・中国)の代表団が議論を行いました。その様子はテレビ・新聞をはじめとするメディアに広く取り上げられました。2009年にイタリア・ミラノで開催されたG8 Youth Summit 2009は、第4回大会に位置付けられます。

発足当初Model G8 Youth Summitと呼ばれていた本会議は、「Model」をその名から外し、今大会から「G8 Youth Summit」へと名称変更を行いました。この変更には、本会議が「模擬」会議の域を脱し、Youth独自の視点を世界に発信するという強い意志がこめられています。現実の政策に立脚しつつも、未来を生きる私たちが思い描く<理想>の社会へと、世界が少しでも近づくことができるように——G8 Youth Summitは、これからも世界中のYouthとともに、グローバル・イシュー解決への青写真を提示してゆきます。

# G8 Youth Summit 2009概要

## 概要

大会名： G8 Youth Summit 2009  
開催期間： 2009年3月15日—21日  
開催地： イタリア・ミラノ、ボッコニー大学 (Bocconi University)  
主催 (イタリア側)： Youth Engagement Promoters  
後援 (イタリア側)： Italian Ministry of Youth Policies (イタリア若年層政策省)  
Forum per la Finanza Sostenibile  
Avanzi  
Bocconi University  
Youth Atlantic Treaty Association  
Forum nazionale dei giovani  
Dot.company  
参加者： G8・O5各国の大学生・大学院生計約100人  
公式ウェブサイト： <http://www.g8youthsummit.org/>

## 主な活動

### 【大臣会合】

大臣会合はG8 Youth Summitの核と位置付けられています。今大会では、G8・O5各国の代表団8名ずつが、各国の大臣役として会議に参加しました。事前に策定したアジェンダについて、参加者は各国の政策を基に、Youthとして思い描く<理想>へと<現実>を少しでも近づけることを目的に議論を行いました。ここでの議論や主張が現実の政策を超えることも、決して珍しいことではありません。議論の成果はCommuniqué(コミュニケ、共同宣言文)としてまとめられ、首脳会合において承認を得たうえで正式に発表されました。なお、今大会で設定された大臣は以下のとおりです。

#### 首脳 Head of State

シェルパ Sherpa (主に首脳会合に参加)

外務大臣 Minister of Foreign Affairs

経済大臣 Minister of Economy

財務大臣 Minister of Finance

環境大臣 Minister of Environment

開発大臣 Minister of Development

防衛大臣 Minister of Defense

### 【経済団体会合】

今大会から初めて、大臣会合に加え経済団体会合も開催されました。日本からも経団連会長役の学生が参加しました。この会合の目的は、経済関連のグローバル・イシューについて議論を行い、学生ならではの解決策を提示することです。なお、Communiquéは大臣会合とは別個に発表されました。

### 【エキスパート会合】

経済団体会合と同様、初めてエキスパート会合も開催されました。グローバル・イシューに関するエキスパート（専門家）役の参加者は、国益とは無関係な、いわば「中立」の視点から議論を行いました。これは各大臣・経済団体代表役の学生が自国の代表として「国益」を追求することと、大きく立場を異としています。

今大会では、以下の3つのエキスパート会合が設定されました。

金融の安定性 Sustainable Finance

気候変動 Climate Change

知的財産権と人道支援 IPR and Humanitarian Assistance

### 【基調講演・在ミラノ総領事館訪問】

気候変動をはじめとするグローバル・イシューの専門家の方々による基調講演が連日行われました。これにより参加者は、現代社会が直面する諸問題について理解を深めることができました。また、各国代表団は大会初日に自国の在ミラノ総領事館を訪問し、激励を受けました。

## 日本代表団一覽



G8 Youth Summit 2009日本代表団  
左から鳥山、矢部、笠井、明石、向川原、堀田、  
深井、日野原、渡邊、大湯（欄外）

役職	名前	所属（2009年3月当時）
内閣総理大臣	向川原 充	東京医科歯科大学医学部医学科2年
シェルパ	鳥山 雪菜	東京大学教養学部文科Ⅰ類2年
外務大臣	大湯 俊介	慶應義塾大学法学部法律学科2年
経済大臣	明石 恵美子	慶應義塾大学法学部政治学科4年
財務大臣	笠井 高秀	慶應義塾大学経済学部2年
開発大臣	深井 瑛子	慶應義塾大学総合政策学部2年
防衛大臣	渡邊 千尋	上智大学文学部英文学科4年
環境大臣	矢部 安希子	聖心女子大学文学部1年
日本経団連会長	堀田 健悟	慶應義塾大学商学部3年
エキスパート（金融分野）	日野原 由佳	Swansea University(UK)1年

## Giorgia Mcloni氏からのメッセージ

G8 Youth Summit 2009の開催に際して、Giorgia Mcloni氏 (Minister of Youth Policies, Italy) からメッセージをいただきました。

Rome, March 16<sup>th</sup> 2009

Dear all,

It is with sincere emotion that I talk to you, young representatives of eight great nations with the aim and responsibility of sustaining the world's economic and social progress. I apologize for not being there, but other important issues prevent me from being with you during this important G8 Event, which could have been a good chance to reciprocally get to know each other.

Knowledge: this is the key-word of the present and the future. Knowledge is based on meeting other people, sharing opinions and experiences; it means having access to awareness. Free circulation of ideas and experiences is the key to progress. Greeks, in ancient times, used to say: "Gignosko kai gignomai". To know in order to be. A thorough reciprocal acquaintance and cooperation with emerging nations is in fact the aim of the Heiligendamm Dialogue Process. Counterparts of this process are Brazil, China, India, Mexico and South Africa, countries representing alone almost half of the world's population. We cannot even imagine not interacting with them because it is on humans we have to focus.

The objectives and goals of the Declaration of the Millennium, eradicating poverty, fighting the most devastating diseases, guarantee education, gender equality and environmental sustainability, are the rules set by men to ensure a future to their own species. Among the crucial issues we find environment protection and climate change. The Kyoto Protocol, the meetings in Rio and Bali and the forthcoming in Copenhagen are the main phases of the uneasy path governments are facing in their effort to conciliate economic progress and the safeguard of environment. My idea of "sustainable development" is to preserve and bring value to the environment and make of it a concrete source of wealth. Resources are to be exploited, not wasted.

Large areas of Africa, Asia and South America are the victims of an unequal world wealth distribution. However, when I refer to resources I refer to both human and moral resources. These intangible assets, also protected by a UNESCO Convention in 2003, as local cultures, idioms and traditions, social customs and traditional handcraft, are elements of which these areas are rich. The combination of this heritage with the extraordinary environment is an opportunity that cannot be missed.



We still lack an essential condition: education and training; in a word, knowledge. It is our precise duty to spread knowledge, since it is an essential instrument to gain prosperity. We cannot let the present financial crisis worsen the situation of the already suffering populations. Often crisis is an opportunity to change: we have to exploit it and make labour regain its real value. Our society has abused of the opulence it is living in and thought financial markets could be exclusively based on money. We have now the opportunity to restart, to go back, rely on the unlimited and invaluable richness of human geniality.

I greet you, dear all, convinced that none better than You can conceive a development more respectful of the Planet and of its inhabitants' needs. Youngsters know that the destiny of the remotest place on Earth is equal to the destiny of the entire world.



Giorgia Meloni

Italian Minister of Youth Policies

[http://www.g8youthsummit.org/allegati/Upload/DISCORSO\\_MELONI\\_engDEF..pdf](http://www.g8youthsummit.org/allegati/Upload/DISCORSO_MELONI_engDEF..pdf)

## 大会期間中の活動

3月15日

### Delegations Arrival in Milan

各国からの代表団が、イタリア・ミラノに到着しました。今回の宿泊先はATA Hotel Quark。イタリア側実行委員会の精力的な活動もあって、四つ星ホテルに格安で泊めていただくことになりました。

G8 Youth Summitでは、二度三度と参加する学生も珍しくありません。到着早々に、再会を喜ぶ参加者の姿が至るところで見られました。

3月16日

### Consulates Visit

G8 Youth Summit 2009開会に先立ち、各国代表団は自国の在ミラノ総領事館を訪問。激励を受けるとともに、会議について助言をいただきました。

日本代表団も、在ミラノ日本国総領事館を訪問しました。東博史総領事様・川西澄子様には、日本の政策やヨーロッパ諸国の動向など、多岐にわたる最終アドバイスをいただきました。



### Opening Ceremony



世界中から集まった約100人の代表団が、初めて一堂に会しました。各国首脳役の学生によるスピーチにより、G8 Youth Summit 2009は幕を開けました。

また、今大会の会場となったボッコーニ大学学長Mario Monti氏、同教授Fulvio Ortu氏から、歓迎の挨拶をいただきました。Giorgia Mcloni氏（Italian Minister of Youth Policies、イタリア若年層政策大臣）からのメッセージも読み上げられました。

### Scavenger Hunt

開会式を終え、初めて顔を合わせる各国大臣同士の親交を深めることを目的に、スカベンジャーハントが行われました。それぞれの役職ごとにチームが編成され、ミラノ市内の指定された有名な建造物の写真を撮るなどの課題をこなし、得点を競いました。

スカベンジャーハントの課題に皆一丸となって取り組む中で、各国代表が自己紹介を交えつつ交流を深めました。会議という公式な場ではなかったため、文化面、経済面、政治面など多岐にわたる分野について率直な意見交換をすることもできました。他国代表団と顔を合わせて話をするすることで、日本からは見ることのできない各国の現状を知ることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。



3月17日

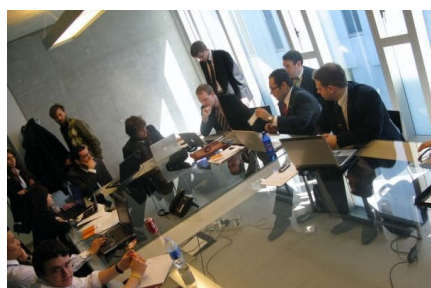
### Milan Downtown Visit



会議に先立ち、各国代表団ごとにミラノ観光のための時間が設けられました。世界最大の司教区ミラノのドゥオモや、スフォルツェスコ城の歴史的建造物、さらには市街でのショッピングを楽しみました。ミラノの街で街中のいたる所で歴史的なゴシック建築を見ることができ、特にドゥオモの荘厳な姿には感銘を受けました。このように観光がプログラムとして組み込まれていることから、本大会が文化交流という側面にも重きを置いていることがうかがえます。

日本代表団の多くは、今回が初めてのイタリア訪問でした。近代都市としてのミラノの姿と、その随所にみられる歴史的建造物との調和に、代表団メンバーはイタリアの文化を見出しました。日本とイタリアの文化の差異を肌で感じつつも、ミラノにおける<近代>と<過去>の融合には、二国の文化の相同性を見ることもできました。

### Sessions for Ministers, Head of NBAs and Technical Experts



会議初日。前日のスカベンジャーハントで打ち解けたものの、まだ全員が緊張した面持ちでした。各会合では初日から重要なトピックが議題となりましたが、この日は手探りでの議論が続きました。また、それぞれの英語の訛りに慣れることも、重要な課題のひとつでした。

### Sessions for National Delegates

今大会では毎日、各大臣会合終了後に各国代表団のための調整時間が設けられています。緊張感もここでは少し和らぎ、終始和やかな雰囲気調整が行われました。

初日の日本代表団調整では、主に各大臣会合での様子が報告されました。それを踏まえ、日本代表団としての主張をそれぞれ再確認。翌日以降の本格的な議論に備えました。



### Panel on Financial Crisis and World Economic Outlook

初日のパネル・ディスカッションは、金融危機と世界経済の展望についてでした。経済学の大学教授などをお招きしてのパネルで、議論は非常に専門的なものとなりました。経済大臣役の学生たちには非常に参考になったようでした。質疑応答の時間も設けられ、参加者は積極的に質問を投げかけていました。

3月18日

### Sessions for Ministers, Head of NBAs and Technical Experts

英語での議論にも慣れてきたせいも、2日目は前日より活発に意見交換がなされました。初日にはわからなかった、他国代表団の主張の真意も少しずつ見えてくるようになりました。また、ランチも一緒にとることで、会議以外の会話も弾みました。



### Sessions for National Delegates

大臣会合の時間が延長され、代表団調整は大幅に時間が削減されることとなりました。2日目の代表団調整では、各大臣報告を受けて、日本代表団内の政策面での更なる連携が模索されました。

### Panel on Financial Inclusion

2日目のパネルの議題は金融統合に関して。連日金融関連の話題がパネルにのぼることからも、今回のサミットの主眼がグローバル恐慌にあることがわかります。残り1日となった会議時間を有効に活用しようと、積極的な質疑応答がなされました。

3月19日

### Sessions for Ministers, Head of NBAs and Technical Experts

最終日。この日は一日を通してコミュニケの文章化が行われました。全ての項目において、再度各国の大臣が同意しているかどうかを確認しながら作業が進められました。もちろん、全ての大臣が合意できない時はそのつど交渉を行いました。この日の議論は実に活発であり、日本代表団もそれぞれの会合において、事前に確認した日本の主張を展開しました。深夜まで議論が続く会合もありましたが、それぞれの会合でなんとかコミュニケ作成にこぎつけることができました。

### Panel on Climate Change

最終パネルは、気候変動についてでした。様々なフィールドが複雑に入り組んだこの問題について、参加者からは多岐にわたる議論が展開されました。

### Final Session for Heads of States

会議最終日となったこの日の夜、全大臣会合から提出されたコミュニケを、首脳が最終確認しました。首脳会議のコミュニケがまとまったのが22時。そのまま各大臣のコミュニケを確認を行いました。細部に至るまでチェックしたため、作業は難航しました。大臣会合の中には夜中の3時にコミュニケが完成したところもあり、結局コミュニケ調整は11時間連続、徹夜で行われました。コミュニケ調整を思わず拍手で終え、各国首脳は休む間もなく、数時間後に控える閉会式のスピーチ準備を行いました。



3月20日

### Presentations of the Results from Technical Experts Panel

エキスパートはこれまで、国益という束縛のない「エキスパートの視点」からグローバル・イシューの解決策を探ってきました。大会最終日のこの日、その成果が発表されました。金融・環境・知的財産権という大きなトピックに、専門家の視点から挑んだエキスパート役の参加者たちには、盛大な拍手が送られました。



### Closing Ceremony



あっという間に過ぎ去った大会期間。エキスパートの成果プレゼンテーションののち、閉会式が執り行われました。開会式同様、各国首脳役の学生によるスピーチが行われました。また、大会を成功に導いた実行委員会のメンバーにも、改めて盛大な拍手が送られました。

閉会式では、Bocconi University教授であるFulvio Ortu氏、Oliver Wyman Groupのマネジメント委員であるScott McDonald氏をお呼びし、大会の成果であるコミュニケに関して多岐にわたるコメントをいただきました。

### Closing Dinner and Party

G8とO5からYouthが一堂に会し、グローバル・イシューについて議論するという貴重な経験ができたことを、改めて嬉しく思いました。短い期間ではありましたが、議論や他の交流を通して強固な友情を築くことができたことを、ここで実感しました。オープニングでは各国ごとにまとまっていた私たちも、クロージングでは国籍など関係なしに皆が楽しそうに、残りの時間を惜しむように和気藹々とイタリアの夜を楽しみました。



## G8 Youth Summit 2009の成果

### Communiqué

G8 Youth Summitの成果は、大臣会合ごとに共同宣言文としてまとめられました。さらに、経済団体連合会とエキスパート会合も独自の共同宣言文を発表しました。いずれも大会ウェブサイト<http://www.g8youthsummit.org/>からダウンロード可能です。

以下に各大臣会合の宣言文の要約と、担当大臣の宣言文に対する評価を掲載します。

#### 【首脳会合 Head of State】

##### ➤要約

G8の軌跡と展望、国連改革、エネルギー安全保障について合意に至った。G8については、G8を非公式な会合であると定義し、そのメンバーシップについては「G8が達成を欲する目標を、達成する準備がある国」であるとした。近年話題となる拡大に関しては、将来的に起こり得るとしつつも現段階では時期尚早であると結論付けた。

国連改革に関しては、「準常任理事国」という新たなカテゴリーの創設を提言した。なお、ジェノサイドなどにおいて拒否権が覆される「例外条項」についても言及がなされている。また、エネルギー安全保障については、代替エネルギー活用と資源産出国との提携について言及した。

##### ➤評価

幅広いアジェンダにここまで詳細な言及ができたことは特筆に値する。グローバル・イシューへの対処には、包括的な枠組みの存在が不可欠である。会議の主眼は、時代錯誤な感が否めない既存の機関を、必要に応じて時代に合ったものへと改善することであった。その点において、本宣言文は<理想>と<現実>の均衡点を探り当てることができており、今後の諸機関「改革」へと貢献すると考えられる。

#### 【外務大臣会合 Minister of Foreign Affairs】

##### ➤要約

対テロに関して、G8とインドは協調しあらゆる形態のテロ行為に対して断固として戦うことを確認した。また具体的な協調の場として、テロの標的となった国々を迅速かつ効果的に支援するため、国連統括の国際テロ対策センターの創設が提案された。更に諸地域における紛争に関し、アフガニスタン・中東・コンゴ共和国・ジンバブエ・イランに対する支援のコミットメントが掲げられた。これらの議論と並行し国際刑事裁判所に関しても扱い、未批准の米・露両国が将来的な参加への前向きな声明を出すに至った。

##### ➤評価

あらゆるテロに対する協力体制を相互確認したことは、テロに対して国際社会が足並みを揃えるという点で極めて重要な合意である。具体的施策としての援助プロセスや情報統括を行う「国際テロ対策センター」の創設というアイデアは、現実においても充分実効性を持っていると考える。また、諸地域の紛争において法の支配や人権尊重等を主眼に、武力によらない対策を議論し合意に至ったことは意義深い。特に国際刑事裁判所に関し、未批准の米・露両国が将来的な参加の姿勢を表明したことは、戦争犯罪に対する国際社会の抑止力という観点から多大な貢献が期待できる。

## 【経済大臣会合 Minister of Economy】

### ➤要約

#### ①WTOドーハラウンド

G8はWTOとその多国間交渉に貢献し続けることに合意した。WTOの多国間貿易システムの重要性を確認し、ドーハラウンド交渉の即時再開を求める。ドーハラウンドの農業分野（NAMA）に関しては、その貿易を阻害する要因を排除するとともに、新興国への支援の必要性を認識している。G7（ロシアはWTO非加盟）は、新興国が農業の関税と助成金を少しずつ、しかし漸増に減らすのであれば、農業関税と助成金を大幅に減らすことを約束する。G7は新興国（49カ国の後発発展途上国を除く）が非農業分野における市場アクセスを増加させること望む。また、貿易を阻害する要因に関する情報へのアクセスと、その透明性の拡大を期待する。ドーハラウンドが「発展」を目的としていることを踏まえ、G8はEBA（Everything But Arms）協定の原則は後発発展途上国に経済状況を改善する機会を与えることに寄与すると考え、WTOに加盟している先進国に、世界の最貧国である49の後発発展途上国に対する「武器を除く全て（Everything But Arms）」の商品やサービスの輸入に対する貿易障害を取り除くことを奨励する。また、G8は後発発展途上国が各々の幼稚産業を保護する権利を持つことに合意し、その産業が十分に発展した後はその国の市場は自由化されるべきだと考える。G7はロシアのWTO加盟を支持し、その迅速な達成のためにあらゆる努力を惜しまない。

#### ②自動車助成金・航空助成金

G8は政府の自動車業界に対する支援は、その崩壊を阻止するために講じられ、経済ナショナリズムに傾倒しないこと、また支援される企業が経営の構造改革を行うことを保証することによって、その支援は正当化されると考える。構造改革とは、燃料効率技術をビジネスモデルに組み込むこと、その様な製品に対する消費者の需要を喚起することなどである。G8は民間航空産業の領域において、助成金を現状以上増加しないこと、長期的には減少させることを約束する。

#### ③CSR

G8は国内・国外において営業する企業に対して、社会的・環境的に責任を持つことを奨励する。その責任は、国際連合の「グローバルコンパクト（UNGC）」及びOECDの「多国籍企業行動指針（OECDGME）」の原則に基づくことを確認する。G8はCSRに関する調査に対して財政的に援助し、民間企業がCSRをビジネスモデルに組みこむ努力をするために協力すべきである。CSRがビジネスモデルとなるように各国政府はCSRの社会認識を高めるべきである。株主を取り込んだ知的空間の設立を目指し、それがCSR原則に基づいて企業を格付けできるようになることが望ましい。

### ➤評価

従来のサミットのコミュニケが曖昧な言葉で一般的な提言に留まっていることに不満を感じ、今回のコミュニケではより具体的かつ抜本的な提案をすることを目指した。その点に関しては比較的達成できたと考える。ドーハラウンドに関して、先進国が新興国に求めるのみならず自らも助成金や関税を下げることを明言したこと、NAMAやEBAに関して後発発展途上国を含め具体的な行動指針を示すことが出来たことは、割合に斬新な提案であったのではないかと考える。しかし、殊にCSRに関しては国が過度に企業に参入すること、文章がやや長く惰性的な印象を与えてしまうように思われる。またCSRの「格付け機関の設立」に関しては、CSRの定義やその評価の難しさから、非現実的である。特にEU諸国と米国・日本においてCSRの解釈と実践が大きく異なることから、まずG8間でCSRの捉え方から確認出来たら良かったと思う。

## 【財務大臣会合 Minister of Finance】

### ➤要約

金融危機に対する対策を短期・中期・長期の3つの視点から提言した。短期では各国とも、保護的な措置をしないなどの条件付きで景気刺激策を歓迎する、という結論に至った。中期的な視点ではヘッジファンド、会計基準、格付け会社への規制を強化し制度改革も行うこととなった。長期的な対策としては、国際通貨基金に途上国を呼び込むことや地域組織との更なる協力が盛り込まれ、世界金融組織という新たな組織の創出に関しても合意に至った。

### ➤評価

金融危機全般を網羅した、専門性の高いコミュニケになった。特に給与制度、バーゼルⅡの改革、タックスヘイブンなどは現実に即した提言をできたのではないかと思う。しかし、理念としては素晴らしいが、現実的に考えたとき実現可能かどうかわからない部分も一部ある。新たな世界金融組織の設立や国際通貨基金改革がその例である。実現可能性を重視するならば、FSF (Financial Stability Forum、金融安定化フォーラム) の役割の強化の方が現実的だったのではないだろうか。

## 【開発大臣会合 Minister of Development】

### ➤要約

G8諸国は、金融危機を理由に発展途上国への援助を削減することはしないことで合意した。なぜなら長期的視点から、より効果的な援助を行うためには、援助額の増額が必要であると判断されるからである。本コミュニケでは、地球規模課題の解決に向けて、農業、教育、マイクロファイナンス、債務帳消し、官民連携、HIV/AIDSにおいて概説した。これからの途上国支援は、先進国の国民参加型の支援が主流となることにも言及がなされた。

### ➤評価

アフリカに焦点を絞った内容となった。世界が抱える諸問題がアフリカに集中していることから、その議題設定は高く評価されよう。特に、実際のG8サミットでは踏み込めないであろう、既存の枠組みを超えた斬新な提案が多く含められたことは特筆に値する。



## 【防衛大臣会合 Minister of Defense】

### ➤要約

透明性のある安全保障体制と世界平和の維持を目指し、米ロのミサイル削減及び防衛システムの問題、NATO新協力体制、核拡散防止条約（NPT）に基づいた核不拡散の更なる推進、武器貿易条約、ソマリア沖における海賊問題の5点についての宣言である。長年続くミサイル問題において、時間はかかるものの米ロ間では良好な解決が見込まれる。NATOは今後も平和維持活動のための軍事活動を続けることが合意された。核不拡散条約では世界的な核不拡散体制においては依然として不透明な点も多く、今後ともG8の枠をこえた世界的な透明性のある不拡散体制の強化が求められる。武器貿易条約はG8で合意し、アメリカも批准する。海賊問題に対してはG8が協力し、問題解決に努めることとなった。

### ➤評価

本年の会議では、従来会議ではなかなか進展が困難であった核不拡散問題に発展をみせた。これはアメリカの政権が大きく変化したことに由来する。特にG8全体が核廃絶に向けて動き出しているということは、今後も揺るがない体制になるであろう。この平和に対して一貫した考え方はNATOや海賊問題においても国際平和への貢献が見られる。いずれの問題においても、日本の提案が100%反映されることはなかったが、多国間の交渉、譲歩の末、日本にとっても問題のない内容となったといえる。総じて世界での平和への意識が高まっていること、G8が率先して世界平和の維持に努めるという高い認識が感じられる内容となった。

## 【環境大臣会合 Minister of Environment】

### ➤要約

環境大臣会合のコミュニケは大きく分けて三分野に渡って作成された。気候変動については2050年までの温室効果ガス削減長期目標に加えて10年ごとの短期目標を設けることを提案することで合意した。またエネルギー供給の分野に関しては再生可能エネルギーの必要性を考慮する一方、核エネルギーやバイオエネルギーの使用に関しては環境への将来的影響の不透明性から一定の条件を設けることとなった。最後に、生物多様性については生物多様性条約（CBD）と生物多様性の保全に向け生物多様性と生態系サービスに関する政府間パネル（IPBES）による科学的調査結果に基づいた議定書の作成を目指すことで合意した。

### ➤評価

洞爺湖サミットで合意された2050年までの温室効果ガス削減という長期目標達成のプロセスとして、10年ごとの短期目標を提示することができた。これは、COP15に向けG8として長期目標達成のロードマップを示した点で高く評価される。また、生物多様性の保全に向けた新議定書の作成や国際エネルギー機関（IRENA）の支持といった新しい取り組みに向けた姿勢は、国際社会にこれらの問題に対する更なる注意を喚起するであろう。

## 【経済団体連合 Head of National Business Association】

### ➤要約

現国際経済は未曾有の金融危機に陥り、一国だけでは解決が困難である事態が数多く発生している。そのため、経済危機の発端となっている米国の金融機関を世界規模で支援し、国際経済を回復することによって産業界の発展・向上を目指す必要がある。

#### ①直面している国際経済状況に対する政府へのビジネス提案

消費率や雇用の改善のためにもエコを意識した新市場を開拓すべく、政府による燃費率向上に向けた研究開発費への一定額の負担や、企業による環境への社会責任を強調する必要がある。

#### ②自由貿易体制

自由貿易体制のさらなる効率化を目標とし、国際通貨基金（IMF）と世界貿易機関（WTO）の改革が必要である。以下の点について合意した。

IMF：紙幣を印刷する権利を排除すべき

WTO：ドーハ開発アジェンダの再構築

#### ③企業格付け機関と国際会計基準

企業と格付け機関の信頼性を取り戻すためには、企業側は積極的に内部の透明性を図る必要がある。国際会計基準に関しては、世界各国が採用する方針でより安定された情報公開を目指すべき。時価評価と簿価評価に関しては、両評価基準を記載した財務諸表を作成し、投資家には必要に応じて各評価基準を理解する能力をつけるべきである。

#### ④公共投資

金融危機による悪影響を低減するため、米国内における金融機関の保有する不良資産を解消する必要がある。そこで、米政府による一時的な管理下に置くことによって主要金融機関の不良資産を時価評価で抽出し、市場の回復と共に不良資産を国債等の形で市場に戻し入れるべきである。

### ➤評価

経済の低迷を抑制するためには、まず産業界を上昇気流に乗せることが鍵となる。今回の会議では、産業界に打撃を与えている大きな要因が「金融機関の苦境」と「金融機関に対する、消費者・投資家の極端な信用低下」の2つであると考えた。

これらを解決するために、企業の透明性、エコ開発による市場の拡大、さらに金融機関改善策による資金の循環に着目したことは、高く評価されるだろう。日本の立場としては、技術面で最先端をゆく日本の自動車産業をベースに市場拡大を図ること、そしてIMFへの資金供給や国際会計基準の採用などにより世界経済の支え役となることが望ましいと考えられる。

## 【エキスパート（金融分野）会合 Technical Expert in Sustainable Finance】

### ➤要約

#### ①格付け機関およびバーゼルⅡ

格付け機関に格付け機関の透明性、格付けの見積もりやそれぞれの製品ごとの異なるリスクを既存するシステムを変える。そしてそれらに義務的な国際基準を課す。また、投資家から格付け機関への出資金を募り、競争力を高める。

バーゼルⅡにおいては、新興市場に対する偏見の問題に立ち向かうためバーゼルⅡの改正を提案する。主に新興市場からの代表の参加をつのり従来の枠組みを取り除く。

#### ②金融包括

途上国でのIMFの活動を奨励し、より多くの人々がローンを組むことができるようにする。そしてIMI（International Microfinance Institute）の設立を通しての国際基盤の創設。G8やG20の国々の出資からIMIを作り、下部には地域ごとの支部を設けそれらは純粋に融資が必要な企業家のもとへローンが組めるようにする。

#### ③ファイナンシャル・エデュケーション

先進国での住宅差し押さえ、低い貯蓄率、移民への排他的金融アクセスを受けて、金融リテラシーや金融商品に対する理解の向上を計る。途上国ではG8らを通してIMIらによる金融教育の試みを行う。将来的な負債の減少を期待する。プロフェッショナルレベルでは義務的な試験を行い、トレーダー資格を付随する。国内では資格へ向けての骨組みを整え、許可を得る。さらに国際的には共通の枠組みを創設する。

### ➤評価

格付け機関およびバーゼルⅡでは既存のシステムの是正を提唱した。特にグローバルな繋がりをもはや世界は無視できないため、新興市場からの参加を問うた。

金融包括では抜本的に金融危機からの反省を受け新たな組織の構成案やG8などの先進国からのバックアップを背景にマイクロファイナンスといった形で途上国の金融システムを整えるものとなる。さらには国際レベルであるため、グローバルな視野からも包括的成長を期待できるものである。

ファイナンシャルエデュケーションは3つの分野からの検討、打開策を通してボトムアップが可能であると考えられる。

全体を通してさまざまな角度からの案によりバランスがとれ、一貫性のあるものであると考える。

## ネットワークの醸成

今大会への事前準備などの多くが、SNSコミュニティを通じて行われました。ここで生み出されたネットワークは、大会においてお互いに顔を合わせたことで更に強固なものとなりました。今大会の参加者たちは会期後も継続的に連絡を取り合っています。将来の世界を担うYouthのネットワークの醸成も、G8 Youth Summitの大きな成果のひとつです。

### 総括

鳥山雪菜 シェルパ Yukina Toriyama, Sherpa

本大会は、昨年発生した金融危機の影響もあり、世界経済の安定と成長をいかにして実現するかに重点が置かれた会議であったように思う。加えて、環境問題やテロリズムなどの新たな脅威という世界規模の課題に先進国としていかにして取り組むかが中心的議題に置かれていた。目まぐるしく変化を遂げる世界情勢にいかにして対処するのか、という各国政府及び国際社会に課された課題とそれに取り組む上でつきまとう困難さを実感できる大会になったと言える。

一般に、学生会議においては「学生らしい視点」が求められ、現存する政府や政策立案者が考えつかないような、また思いついても実現するのが難しい、創造的かつ新しい観点からのアプローチが期待される。しかし、本大会の共同宣言文は必ずしもそのような「学生らしさ」を全面に反映させたものではなかった。無論、議論の段階では多くのイノベティブな意見やアイデアが飛び出すこともあった。だが、多くの場合それらは交渉や議論の過程でより現実的なアプローチによって淘汰されていった。閉会式のある一国の首相の言葉を借りれば多くの首相・大臣・エキスパートが現実の政治家と比較して「時により保守的であった」と言える。

本大会では、合理的範囲内であれば各国政府の現政策を必ずしも追従しなくてもよい、とするのが各国代表団の共通認識であった。そのような姿勢の下、政治家とは違い諸利害がからまない学生の立場から、今の課題に対して各国の「あるべき姿」を模索しようとした。だが、限られた時間の中で、より専門的な知識を持つ者を中心に現状の分析をすればするほど、変化すべきという認識は共通していても具体的な政策レベルになると大胆な変化には消極的になってしまうというジレンマにぶつかっていた。これは模擬会議を通じて実際の外交の難しさを体感する、という意味ではその目的にかなっていた。だが、今後学生の声として本会議でまとまった共同宣言文を公にすることを考えれば、理想と現実のギャップの中でより限りなく理想に近い現実的なアプローチを模索すべきだったのかもしれない。

日本代表団としては各大臣ともに自国の立場をいかにして確立すればいいのか、事前のアジェンダを決定する段階から悩み、その課題に対する自分の問題意識と日本としての立場をいかにして擦り合わせるかに苦労していたように思う。そのようなプロセスを通して各人の問題意識を深めるとともに、現実の諸問題に正面から向き合うことができていたように感じた。だが、実際の会議が始まると、事前会合にて**Europe's Voice**としてヨーロッパの意見を共同宣言にまとめていたヨーロッパ各国の代表団などと比較して、日本代表団のプレゼンスは必ずしも高くなかった。今後は日本代表団の中で各大臣間の調整を更に充実させ、日本代表団としての政策のレベルに磨きをかけ、立場を異とする他国代表をいかに説得するかが課題となるであろう。

課題は多く残るものの、本大会は現段階での自らの、そして先進諸国の限界を知り、その限界をいかに越えて行くべきかを考える契機になった点で非常に有益であった。本大会で受けた多くの刺激を心に刻み、自らの成長に結び付けたいと思う。

## 【会議要旨】

### ➤G8の役割

非常に曖昧な話題であり、議論も多岐にわたった。G8がその役割を自ら定義することは、なるほど無意味なことと映るかもしれない。しかしながら当初の主要経済国会合としての役割が失われた今、世界の声なき声に耳を傾ける姿勢を明文化したことは——自ら進んで＜理想＞実現のための重責を引き受けたという点において——特筆に値する。会議ではその役割の更なる明確化が試みられたが、具体的なイシューについては各国で意見が異なり、合意には至らなかった。他国の姿勢についてはそれぞれ思うところがあったが、それぞれの主張の裏に潜む「論理」は共有できたと感じた。

### ➤ハイリゲダム・プロセスとG8の将来

近年最も話題となるG8拡大論が、ここでも議論の焦点となった。しかし会議では思ったほどの対立は見られず、むしろO5側が時期尚早であると主張した。(なお、本大会はYouth独自の視点を提示することが目的であり、模擬会議ではないことに改めて注意されたい。) 将来的な拡大については異論なく、今後も新興国との対話の場である「ハイリゲダム・プロセス」を継続・拡大する(「ミラン・プロセス」)ことで合意に至った。

### ➤国連改革

国連安保理改革について、最後までぎりぎりの交渉が続いた。焦点となったのは拒否権と安保理のメンバーシップであった。拒否権については、その撤廃を主張するイギリスと、拒否権撤廃はリスクが大きいとする日米露などが対立した。しかし拒否権が時として障害となることでは合意しており、結局拒否権制限でまとまることとなった。

メンバーシップについては、具体的な国名よりもその方法論が焦点となった。常任・非常任や理事国数などで対立したが、結局「準常任理事国」というカテゴリーの創設で合意に至った。また、この改革案を定期的にレビューしていくことも提案された。

## 【所見】

「かくも不安定な＜現実＞を＜理想＞に可能な限り近づけたい」「地球規模の課題に対してYouth独自の視点を提示したい」——こうした思いはどの参加者にも共通していたはずだった。しかしながら、議論を続ければそれだけ一層、しばしば言及されるような「創造性」や「独創性」に様々な形で次々と制限がかかってゆくのを目の当たりにすることとなった。これは首脳全員の共通認識であったように思う。自らの議題のみならず他大臣の議題についても理解を深めてきたせいであろうか。大胆な提案をしようとしても、問題点ばかりが浮き彫りとなったのである。

＜理想＞と＜現実＞のあいだで振り子のように揺れ動いたこの数日間で、宣言文に記された合意ができたことは、確かに評価に値する。だが、今大会の成果や諸問題の解決へ向けた前進を声高に謳うことは、少なくとも私にはためられる。むしろこの数日間でうっすらと見えたガラスのような＜限界＞の感触を忘れまいとすることが、そしてそれを自らの課題として受け入れることが、最も重要なことではないだろうか。

「ここは何より最高の練習の場だ」と何気なく誰かが言っていたことを思い出す。たとえ今後どれほど社会的インパクトの大きい会合になろうとも、G8 Youth Summitの最大の役割は、参加者が抱える課題を顕在化させることにこそある。それを将来に資することは、幸運にも代表団として参加した者の特権であり、また何より義務であろう。

## 【会議要旨】

### ➤カウンターテロリズム

あらゆるテロに対して各国が協調し対抗する姿勢を確認した後、具体的な協力体制を担保する枠組みについて議論した。さらに国際社会における正義のあり方、という観点から国際刑事裁判所についてもコンゴ共和国の議論と並行する形で扱った。協力体制については国連の下、中央的なテロ対策機関の創設が提案され合意に至った。国際刑事裁判所に関しては未批准の米・露がどのような声明を出すかで議論が紛糾した。全世界的な法の支配の確立と戦争犯罪への抑止力という視点から議論を重ねた結果、両国から将来的な参加への前向きな言質を引き出すことができた。

### ➤諸地域における紛争

#### ①アフガニスタン

中央アジア諸国という議題の中でも、テロリストの温床として喫緊の対策を要するとの認識から議論が行われた。特に(1)アフガン警察・軍隊による治安維持 (2)人権の尊重を主眼に置いた国造り (3)社会・経済的發展 (4)麻薬撲滅戦略 (5)タリバンとの折衝という5つの視点から対策を協議し、協力する姿勢を表明した。

#### ②中東・ガザ

イスラエル-パレスチナの二国併存が中東の安定には不可欠であるという認識を共有したうえで、武力行使における均衡性の意義を確認した。加えてガザ地区の劣悪な人道的状況に鑑み、封鎖措置解除の必要性について同意に至った。

#### ③コンゴ共和国

上述の通り国際刑事裁判所の訴追に触れ、その折に同機関に対する各国の声明について議論した。その後は国連コンゴ共和国ミッション (MONUC) に話が及び、国連の指揮下における平和構築の重要性とその必要性について扱った。

#### ④ジンバブエ

各国が自由と人権保障の観点から、直近の首相任命について歓迎の意を示した。加えて民主主義の実現に不可欠な法の支配、崩壊した経済の再建に向けロードマップ作成を示唆し、それに対する支援の意思を声明に盛り込んだ。

#### ⑤イラン

まず同国がIAEA等国际社会の要求に対し、満足に答えていない現状を共有した。後にアフガン及び中東での平和構築に関してイランが重要な位置を占めており、改めて各国が外交政策の見直すことの必要性を相互に確認した。

## 【所見】

例年にも増して議題が多く難航することが予想されたが、今年から始まったEUrope's Voiceでの声明を適宜参照することで時間を効率的に使うことができた。今回は紛争問題に多くの時間を割いたが、その中で「中立国としての日本」という立場がいかに貴重かつ有効なものかを再認識できた。国際刑事裁判所についての極めて前向きな合意も、その姿勢から他国を議論に巻き込んだ結果、生まれた成果の一であると考えている。

各国代表団の会議での存在感には目を見張るものがあった。日本代表団として行ってきた準備の成果はコミュニケの随所に見受けられる。しかしその一方、各国学生の備えた議論における<巧みさ>を、より練磨する必要があると感じる1週間でもあった。ドメスティックな視点のみで生き残れる時代は過ぎ去った。我々は国際社会の一角を担うアクターとしての矜持を胸に、常に世界を見据える使命があるのではないだろうか。

## 【会議要旨】

### ➤ドーハラウンド

工業品に関しては自由貿易、しかし農業に関しては保守貿易の立場を取る日本やフランスと、農業分野において市場開放、低関税を求める米国、カナダが対立した。しかし、膠着したドーハラウンドを早期に再開させることを最優先することに合意し、米国、カナダ、EUは農業に関して「補助金を削減すること」、日本は「関税を下げることを条件に、何とか意見を合致させることができた。また、新興国に市場を開放することや関税を下げることを一方的に求めるだけではなくて、G7が率先して関税・助成金を段階的に下げてゆくことが、ドーハラウンドを再開する第一歩になるという見解で一致した。

### ➤自動車・航空機助成金

エアバスとボーイングの値下げ競争に関しては、米国とEU諸国以外はあまり関係のない事柄だった。自動車産業に対する助成金や救済措置に関しては、フランスや特に米国の経済・雇用維持に大きく関係している自動車産業を潰すことによって起こりうる弊害は甚大であり、それよりは助成金や救済措置を講じるほうが賢明だということで意見が一致した。しかし、助成金や救済措置助成金付与は条件付であり、一つはその期限は経済が立ち直るまでということ、もう一つは従来の経営を見直し環境を意識した技術開発を進めるとということ、と取り決めた。しかしながら、零細であるロシアの自動車産業に対する助成金は例外とすることで合意に至った。

### ➤CSR

各国のCSRの定義や認識の違いを痛感する議論となった。米国はCSRを企業がコミュニティーに利益を還元すること、インフラクチャーなどを整備することなどと解釈しており、環境、人権を意識しているEU諸国などとは大きく乖離していた。しかし、国連のグローバルコンパクトやOECDのガイドラインなどを原則とすることに同意したことで、未だに曖昧なところは残るがCSRの指針が少しは定めることができた。企業の競争力を妨げないことを条件として、G8政府はCSRを推奨すること、そのための社会意識を高めること、またCSRを効果的なビジネスモデルに組み込むことに尽力することに同意した。

## 【所見】

経済会議は世界大不況の時勢もあり、非常に白熱した議論となった。話すべきことが沢山あったが、時間が不足していたために一つ一つにあまり時間をかけられなかったことは残念だった。それゆえであるのか、会議や話し合い自体がコミュニケを作ることが目的としてしまったように感じた。会議の帰結・まとめでしかないコミュニケが会議の目的となり、いかにコミュニケをまとめるために合意をするかに執着してしまったことが悔やまれる。会議や話し合いを効率的に進めるために、会議開始以前から大臣のメンバーとは密に連絡を取り、他国の政策などを研究しておくことが望まれる。



## 【会議要旨】

財務大臣会議では「金融危機」をテーマに大きく分けて3つのことについて議論した。

### ➤景気刺激策（短期的な視点での行動指針）

G8が世界経済の牽引役であることを確認し、景気刺激策は一国のみならず世界経済をも利するという認識から、G8として景気刺激策を歓迎するという合意に至った。その際、それらを社会・環境に配慮し行うこと、景気刺激策により途上国への支援が減ることのないようにすること、「バイアメリカン」のような保護主義的な政策はしないことを確認した。バッドバンクの創設など、具体的な方法については各国に一任することで合意したため、議論されることはなかった。

### ➤規制、監督（中期的な行動指針）

主にタックスヘイブン、ヘッジファンド、会計基準、給与体系について話し合った。タックスヘイブンに関しては、脱税の関与が疑われる金融機関への情報開示を求めるとともに、何らかの罰則を設けることとなった。給与体系については成功報酬の割合を減らし経験も踏まえたものとする、いわゆる日本的給与体系を推進することになった。

### ➤金融機関のリフォーム

国際通貨基金（IMF）と世界金融機関（WFO, World Financial Organization）という二つの国際機関について議論した。この他に、バーゼルⅡなども議題に上った。IMFに関しては、途上国を更に巻き込むことで、西洋中心の現体制を終わらせ、より国際的な機関にすることで合意した。また日本がアジア地域で行っているチェンマイ・イニシアティブを評価し、IMFが更に地域と連携して活動することでも合意に至った。WFOは既存のフィナンシャル・スタビリティ・フォーラム（FSF）の活動の枠を拡大させた、新たな金融組織である。WFOでは政策の立案、実施、監視監督を行い金融の安定化を目指すことで合意した。しかしその実効性については疑問が残されたままであった。

## 【所見】

非常に幅広い議題を短時間で議論したため、密度の濃い会議となった。12月に選出されてから自分なりに準備をしっかりと進めてきたつもりではあったが、知識の差を感じた。周りがみな大学院生であったため非常に勉強になったと同時に、ひとつひとつのトピックに関して非常に深い知識が必要であると痛感させられた。

財務大臣会合が全ての大臣のなかで一番遅くまで会議を行っていた。最後に話し合ったトピックが新国際通貨体制についてだったが、これが非常に紛糾し、最後は首相に判断を仰ぐまでになった。ここで主に話し合われたのが、まず、今のままのシステムで持続可能なのかということであった。これに関してはほぼすべての大臣がノーと答えたが、それに代わるシステムがないため意見が分かれた。学生らしく大胆なコミュニケをまとめたかったが、アメリカ・イギリスの強い反対にあい、新たな制度の可能性はコミュニケに掲載することが出来なかった。その際首相の一人が「学生は本物の政治家より保守的だ」と言ったのが非常に印象的だった。

一連の活動を通じて多くを学び、非常にためになったと感じる。今大会はこれまで自分が学んできたことが活かされた場であったと同時に、自分の力不足を感じた場でもあった。今後更に成長して、次の機会があればぜひ参加したい。

### 【会議要旨】

開発大臣会合では、アフリカ開発を議題とし、農業・教育・マイクロファイナンス・債務帳消し・官民連携・HIV/AIDSについて議論した。

#### ➤農業

持続的な農業の発展にどのように先進国が関与できるかについて議論した。また、支援だけでなく自助努力（ownership）の重要性を強調することで各国が合意した。

#### ➤教育

先進国からの教員派遣システムの構築について話し合った。また、初等教育推進と貧困問題解決へ向けて、世界食糧機関（WFP）による学校給食プログラムへの支援などが挙げられた。

#### ➤マイクロファイナンス

外国人投資家の投資環境の改善について議論した。特に返済システムに関しては、地域の金融会社を使用することや、リスクの削減方法などが議題に上った。この実現には都市銀行、NGOやドナー国の更なる協力を必要とすることも指摘された。

#### ➤債務帳消し

最貧国のみへの債務帳消しという結論で合意した。重債務貧困国（HIPC）と多国間債務救済イニシアチブ（MDRI）の双方において100%の債務帳消しの資格を得ない国々に関しては、戦略を提案することとした。

#### ➤官民連携

持続可能な開発の視点から、官民連携が不可欠であることで合意した。官民連携により、官だけでは届かなかった部分への援助を、民間が補うことができると期待されるためである。ここでは特に、いかにして民のノウハウを官に伝え、相互に連携していくかについて議論した。

#### ➤HIV/AIDS

ローマ法王のコンドーム使用反対発言に対し反発が出た。HIV感染予防のための3段階のアプローチについて合意した。すなわち、まず既存の法的枠組みは、より効果的に国民の健康に関心と呼び掛けるよう修正すべきである。次に、調査のための減税や、交付金などの実施が不可欠である。第三に、特許権による医薬品アクセス問題を改善する必要がある。

### 【所見】

G8諸国と中国の9カ国で会議が行われた。開発大臣の会議では一番年下であり、唯一のアジア人ということがあり知識と言語レベルの差がハンディキャップとなったが、非常に勉強になった濃い五日間を過ごすことができた。開発分野を専門にして働いている社会人も多く、ためになった。サミットが始まる前までのアジェンダには難民も含まれていたのだが、ロシアとイギリスが反発していて話し合うことができなかったのでコミュニケには記載しなかった。債務帳消しについては、日本だけが反発していたので、8対1で議論を進めていた時があった。

## 【会議要旨】

本年は米ロのミサイル削減及び防衛システムの問題、NATO新協力体制、核拡散防止条約（NPT）に基づいた核不拡散の更なる推進、武器貿易条約、ソマリア沖における海賊問題の5点について議論が行われた。事前活動として、実際に広島核兵器関連の施設を訪問し、核戦争の歴史、日本の核兵器に対する考え方などを学んだ。参考文献を読みこむことで、日本だけでなくG8各国の考え、NATO、海賊問題など幅広く情報収集に努め、会議に臨んだ。

### ➤ミサイル縮小

米ロのミサイル縮小問題と、米国の東欧諸国におけるミサイル防衛システム配備の問題に絞り議論が進んだ。米ロのミサイル防衛システムは共通の脅威であるイランの核問題をG8間で解決することにより米ロの対立、ミサイル数の削減につながる。この点を提案したことにより、両国の歩み寄りに貢献した。

### ➤NATOの新協力体制

日本は中立の立場を貫き「平和のため」を第一に考え、解決策を提案した。NATO間でも平和維持活動について意見が割れていた。NATOとロシアの対立も議論された。

### ➤核不拡散条約（NPT）

日本は核兵器の削減、廃絶に対しては高い意識がある。日本が長年核兵器の廃絶という姿勢を誇示し続けてきたが、本年はG8全体が核廃絶に向けて取り組むという強い姿勢が誇示された。その最大の成果は北朝鮮の核の脅威をG8で共有して取り組むべき問題と認識ができたことである。しかしながら、イラン、インド、イスラエルは他国の国際関係上、コミュニケには明記されなかった。

### ➤武器貿易条約

アメリカのみが批准していない条約であるが、アメリカの政権交代を受け、アメリカは本条約の締結に向かうという点で問題なく合意された。

### ➤海賊問題

G8は協力してソマリア沖の海賊を監視するためのセキュリティーセンターを設立することに合意した。この施設は海賊が攻撃してきた際、商船に明らかに危険が迫ったときのみ迎撃するという点で日本の防衛に対する姿勢が大いに尊重されたものとなった。

## 【所見】

防衛問題に関して日本が大きく主張できる点はやはり核問題であった。その他の問題において日本の発言力は低いと実感した。この点は日本の弱みではあるが、同時に強みである。日本は原爆の唯一の被害国として世界に核の廃絶を唱える義務・責任・使命があると考えられる。しかしながら、廃絶という目標と現実には大きな隔りがある。日本は少々理想主義的な点があると思われるが、一貫して核廃絶を唱えるのが日本の役割である。その他の問題においても徹底的に平和構築を主張した。結論として、日本は理想主義と思われるかもしれないが、強固な意志を貫き通すべきである。他国との交渉を通し、隔りを縮め進展を見せることを期待する。我々の核廃絶、他の諸問題は目標があるからこそ達成できると考える。

## 【会議要旨】

### ➤気候変動

G8が温室効果ガスの削減に対して積極的に取り組むことに合意し、2050年までに温室効果ガスを半減させるという長期目標に現実性を持たせるべく10年ごとに削減目標数値を設定することとなった。また京都議定書の付属I国だけではなくその他の国にも具体的な排出削減目標を掲げることを推奨した点も今会議で一步踏み込むことができた点であるといえる。その他にも排出権取引の有用性や環境税の将来的可能性の模索など新たな温室効果削減に向けた手段が話し合われた。

### ➤エネルギー供給

エネルギー供給については、再生可能エネルギー、核エネルギー、バイオ燃料、送電システム、CO<sub>2</sub>の回収・貯留技術（CCS）の5点について話し合った。特に大きな対立点となったのは核エネルギーとりわけ原子力発電の新規建設、将来性の是非である。日本、フランスの二国は原子力発電の有用性と将来的可能性を主張したが、そのほかの国家は放射性廃棄物の処理や管理における過程の安全性に疑問を呈し、将来的な原子力発電所の廃止に向けたプロセスを今後展開していくことを主張した。最終的には、核エネルギー使用国に放射性廃棄物の責任ある処理と原子力発電の安全性を奨励することで合意した。

### ➤生物多様性

本会議では生物多様性の保全に向け生物多様性と生態系サービスに関する政府間パネル（IPBES）による報告、調査を支持し議定書作成の礎とすることで合意した。会議では、海洋生物の保全という項目で日本とその他の国家との間に日本の調査捕鯨に対する見解の対立が見られ議論は難航した。しかし、最終的にはコミュニケにて海洋・陸上両者の生物多様性の保全に言及し、捕鯨に関しては言及しないことで妥協が図られた。また、コペンハーゲンで開催されるサミットにおいて、熱帯雨林保全のための基金の設立や周期的農業の実施など新しい対策が取られることを求めることで一致した。

## 【所見】

今会議を通じて、特にEUという多国間の枠組みが環境対策においても先駆者となり世界に大きな影響を与える存在になっていると感じた。日本の政策を熟知することも重要であると思うが、それと同時に他の参加国の政策についての知識を深めておくべきであったと悔やまれた。例えば、日本が不参加であっても、G8会合に参加している国の多く参加している環境問題に対する国際的枠組み等が議題に挙げた時には、知識の薄さが圧倒的に不利になるということを痛感した。しかしながら、会議全体を通して率直な意見を戦わせた結果として、各国が納得できる妥協点を見出し、コミュニケという形にまとめることができた点は非常に有意義であった。

## 【会議要旨】

### ➤現経済状況における新ビジネス開拓・自動車産業

現在進行形とされている経済の低迷を抑制するにあたって、世界レベル協力し合い、グリーンビジネスの研究開発を促進する必要性について語った。そこで各国が自動車産業において燃費規制の強化やハイブリッド車の研究開発を政府が支援する形で低迷する自動車産業の需要を喚起し、環境問題を意識することによって産業の回復を図るということに各国が賛成した。さらに、自動車産業において今後の中国のマーケットに着目し、中国の自動車産業の海外進出に伴い、自由貿易を支持してもらうことが妥当であることとなった。

### ➤国際通貨基金と世界貿易機関

自由貿易体制の維持という観点から、発展途上国を支援・発展するために国際通貨基金の再構成とG8各国が代表例として積極的な出資をすることに賛成した。さらに、中国との自動車産業市場の拡大という意味でもドーハ開発アジェンダの必要性について語った。O5国として会議に参加されていた中国代表もG8以外を代表するという形でドーハ開発アジェンダの再結成に向けて協力的な姿勢を持つことに納得した。

### ➤格付け機関の監督・国際会計基準

格付け機関による妥当な評価を得るためにも、企業内情報の透明性を強めることについて合意した。社会問題に対する企業の責任という観点から、企業による社会や環境問題に対する取り組みを評価し、公表する「グリーンレーティング」の重要性を拡大するという議論も行った。反対意見もあったため、強制ではなく、自主的に評価対象として申請するシステムを取った。さらに、国際会計基準の採用も積極的に行うことに各代表者が合意することとなった。

### ➤政府による金融機関への政策

各国が自国の金融機関の存続を維持するために、政府に対して資本注入を支持することについて語った。そこで、政府による金融機関の一時的な管理下に置くことで不良資産を抽出し、残る資本の活用によって市場での信頼性をいち早く取り戻すべきという結論に至った。重要点としては、政府による一時的な介入を支持すると各国が賛成したことである。

## 【所見】

異例な世界規模による経済危機の影響によって例年以上に深刻な事態に直面する産業界を改善することが議論の中心となった。議論の過程で、環境とビジネスの連結が議題の軸となったことが解決への道標であると実感した。さらに、政府介入に各国が賛成したことが世界の市場産業界の過酷さを物語っていると実感した。

### 【会議要旨】

エキスパート会合では、近年特に話題となっている問題に的を絞って、国益を問わず、いわば「中立」の視点から議論を行った。

2008年度後期の世界経済は、アメリカ発のサブプライムローン関連のバブル崩壊を皮切りに急激に冷え込んだ。いわゆる、空前かつてないグローバル規模の金融危機である。それらを受けて金融分野エキスパート会合では、金融持続性のアジェンダのもとで、金融持続性維持への優先事項を決めるべく議論を行った。

会議のスタイルとしては首相会議や大臣会議とは若干異なるものであった。第一にエキスパートは前述したように国益を問わないこと、そして第二にアジェンダが金融持続性という極めてシンプルなものであったことが主な理由であると考えられる。事前作業として、各国の金融対策と、金融持続性に向けた対策について各人の意見をまとめ、会議に臨んだ。

会議では初めに各国のエキスパートの優先事項を持ち寄り、全体として三つを絞りこんだ。だが、この作業が非常に困難なものであった。特に、IMFの改革問題や新たな貨幣制度の設立についての議論は紛糾した。（IMF改革は個人的にもリストに入れていた。）これについては結局、新たなIMI（International Microfinance Institute）という組織設立の提案をすることでまとまった。また、米ドルに変わる新貨幣制度（過去に経済学者ケインズが唱えたバンコールのような制度）をフランスが打ち出そうとしたが、現実性の欠如を指摘されて退けられた。新貨幣制度の議論は、結果的にイギリス、アメリカ、カナダ、これらのネイティブスピーカー達が押し切った形となったといえる。

最終的に優先対策として、格付け機関とバーゼルⅡ、金融包括、そしてファイナンシャル・エデュケーションを提案することで合意し、共同宣言文を作成した。格付け機関とバーゼルⅡでは返済システムを緩和し競争を高め、バーゼルⅡのリスクチャージをさらに課すようにした。金融包括では途上国におけるマイクロファイナンスを通しての融資機会の拡大を狙った。そしてファイナンシャル・エデュケーションにおいては先進国、途上国、プロフェッショナルレベルでのアプローチを提案した。

### 【所見】

エキスパートというG8 Youth Summitにおける新たな枠組みへの試みは、首相や大臣クラスの議論とは一線を画しチームワークが強く求められたものであったが、金融持続性という特化したアジェンダにすることにより焦点を定めた論議を行えたのではないかと感じる。

反省として、会議全体の時間が短かったため、会議最終日には深夜までかかり苦労したことが挙げられる。会議における時間配分を各国とも強く意識し、実行すべきだったと強く思う。また、金融持続性の議論は財務大臣会合と重なる部分もあるため、エキスパートと財務大臣との間の連携を強めることで、議論のレベルを高めることが可能だったのでは、とも思う。また全体を通じてネイティブスピーカーの主張に圧倒され、自分自身の語彙力の乏しさを痛感することもしばしばあった。

## G8 Youth Summit 2010へ向けて

G8 Youth Summit 2010は、2010年5月にカナダで開催されることが決定しています。現在はカナダを中心とした各国実行委員会が、ウェブを通じて開催に向けた準備を進めています。

### G8 Youth Summit 2010概要

開催時期：2010年5月

開催場所：カナダ

※日本代表団募集は2009年8月以降を予定しています。

### G8 Youth Summit Japanの活動

G8 Youth Summit Japanでは、現在ミラノ大会の活動報告（報告会など）を進めるとともに、実行委員会ウェブサイト（<http://g8ysjapan.org/>）を鋭意作成中です。大会とその事前準備を通じて学ぶことができる「知」の深さにおいて、他の学生会議とは大きく趣が異なるG8 Youth Summit——その魅力を、ウェブサイトを通じて全国に発信してゆきます。

また、G8 Youth Summit 2010に向けた渉外活動も行っています。G8 Youth Summitは今後しばらく海外開催が続くため、日本代表団にとっては渡航費が大きな負担になります。その負担を最小限にすべく、最大限の努力をしてゆきます。

### G8 Youth Summitの展望

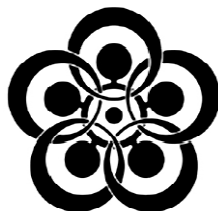
G8 Youth Summitでは今後、模擬会議の域をさらに脱し、グローバル・イシュー解決へのオルタナティブを提示する〈独自色〉を強めてゆきます。こうした議論の成果を効果的に現実の政策に反映させるには、メディアによるカヴァーが不可欠です。したがって今後の大会においては、G8 Youth Summitの開催時期を実際のG8サミットに可能な限り近づけることを検討しています。

## スポンサー一覧（日本代表団）

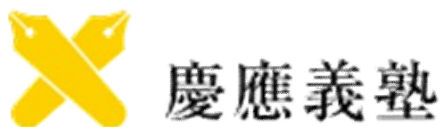
財団法人 双日国際交流財団



国立大学法人 東京医科歯科大学



学校法人 慶應義塾



## 協力団体一覧（日本代表団）

後援  
UNHCR駐日事務所





## 謝辞

G8 Youth Summit 2009に日本代表団を派遣するにあたり、多くの個人・団体の方々から多大なご支援をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

財団法人 双日国際交流財団  
国立大学法人 東京医科歯科大学  
学校法人 慶應義塾

東博史様 (在ミラノ日本国総領事館 総領事)  
大川正人様 (環境省 北海道地方環境事務所環境対策課 課長補佐/環境管理専門官)  
大塚航様 (外務省 経済局政策課 課長補佐)  
香川敏幸様 (慶應義塾大学 総合政策学部 教授兼政策・メディア研究科委員)  
川西澄子様 (在ミラノ日本国総領事館)  
岸守一様 (UNHCR駐日事務所 副代表)  
柴田真吾様 (アクセンチュア株式会社)  
神保謙様 (慶應義塾大学 総合政策学部 准教授兼政策・メディア研究科委員)  
鷺見徹也様 (横浜国立大学 教育人間科学部 講師)  
丁寧様 (国際交流財団)  
手島裕明様 (環境省 地球環境局地球温暖化対策課国際対策室 主査)  
中島健様 (外務省 領事局邦人テロ対策室 総務班長)  
中村桂子様 (東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 准教授)  
服部淳彦様 (東京医科歯科大学 教養部 教授)  
福嶋慶三様 (環境省 保健部企画課 企画法令係長)  
森谷直子様 (環境省 地球環境局地球温暖化対策課国際対策室)  
和田勝様 (東京医科歯科大学 教養部 教授/教養部長)

G8 Youth Summit Japanese Delegation Alumni

(順不同)

## G8 Youth Summit Japan (日本事務局)概要

G8 Youth Summit Japanは、G8 Youth Summitへの日本代表団派遣事業を目的に2008年3月28日に設立された、非営利・学生有志団体です。主として前年度日本代表団により構成されています。

活動内容は主に以下のとおりです。

- 日本国内における、G8 Youth Summitの認知度向上を目的とした広報活動
  - 日本代表団の選考・教育
  - 日本代表団参加費および渡航費のための渉外活動
  - 大会主催団体との連携と、参加者間でのネットワークの醸成
- ご質問などありましたら、

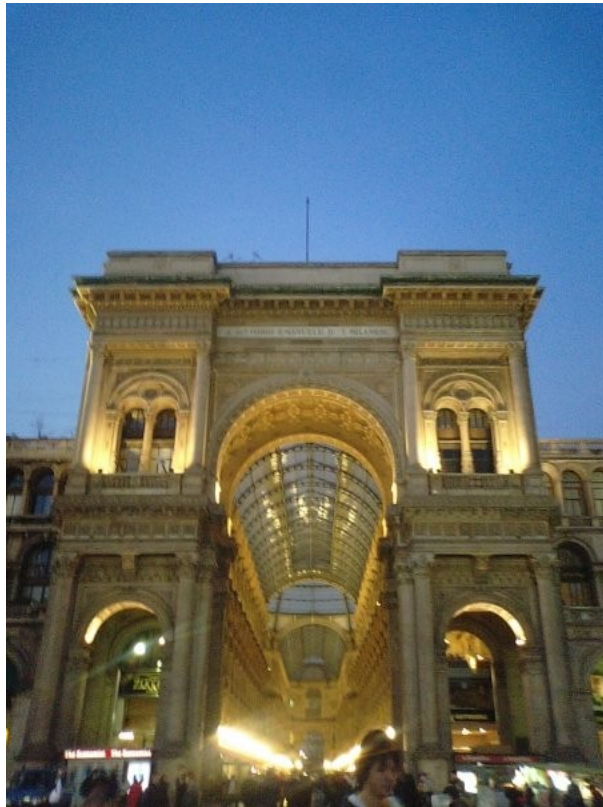
[info@g8ysjapan.org](mailto:info@g8ysjapan.org)

までご連絡ください。

役職	名前	所属 (2009年3月当時)
統括	松本 秀也	慶應義塾大学商学部3年
副統括	中町 栄見	慶應義塾大学総合政策学部4年
渉外	鈴木 悠平	東京大学教養学部文科 I 類2年
広報	山田 千尋	横浜国立大学教育人間科学部2年
広報	坂本 茉莉亜	東京大学法学部3年

2008年度G8 Youth Summit Japanメンバー





**Edited by:  
G8 Youth Summit Japan,  
Japanese Delegation 2009**

**Published by:  
G8 Youth Summit Japan**

**<http://g8ysjapan.org/>  
[info@g8ysjapan.org](mailto:info@g8ysjapan.org)**